

高度経済成長と生活変化

第6展示「現代」のテーマから

The High-Economic-Growth Period and Change of Lifestyles :
From the Theme of the 6th Exhibition "Modern Times"

関沢まゆみ

SEKIZAWA Mayumi

① 民俗学と高度経済成長

② 都市の団地

③ 消えた山の生活

④ 都市型生活とゴミ問題

⑤ 時差の中にみる高度経済成長の影響

⑥ 論点

【論文要旨】

本館第6展示「現代」の「高度経済成長と生活の変貌」のコーナーでは、高度経済成長期に生まれた新しい都市型生活の象徴として団地を、そしてその都市部へ電力や水資源を供給するために新しく造られたダムとそれによって消滅した山村の生活を、それぞれ対比的な位置づけでとりあげた。ここではそれに関連する研究情報として、高度経済成長期に起こった生活の変化とその後、そして人びとの意識や価値観の変化についての分析を試みた。それらを通して論点として浮上したのは、以下のような諸点であった。第一に、民俗学の特徴は、高度経済成長期だけでなく、そこに端を発しながらそれ以降に急速に進んだ生活の変化について追跡的に把握し変遷論的な視点から分析を進める点にある。第二に、それはたとえば昭和30年代には憧れの団地であったのが昭和40年代には郊外の1戸建てマイホームが憧れとなるなど変化が早かったこと、ダム建設によって水底に沈んだ村ではそれまでの自給自足的な山の生活が失われた一方、現在でも鎮守社の秋祭りを継続して村人の親睦の会が継承されていること、など変化と継続との両方の視点が有効である。第三に、高度経済成長が生んだものの一つが、大量生産、大量消費、そして大量投棄というまったく新たな生活問題であったが、「東京ゴミ戦争」に象徴されるようにそこには物質としてのゴミ問題に止まらず、人びとの不潔、汚穢をめぐる意識としてのゴミ問題が存在し、その克服への努力の実際が確認された。第四に、かつて日露戦争後の農村から都市への人口の大量移動に対して柳田國男が指摘した「家の自殺・他殺」が、従来とはまったく異なる規模で起こっている現場の確認ができ、それらについてのより広範な調査情報の収集の必要性が痛感された。そして、もっとも重要な第五の点として指摘できるのが、「生活革命」という語および概念を安易に使用してはならないという論点である。高度経済成長期を通じて、人びとの生活様式が変化するとともに人びとの意識も変化した。その意識の変化のなかで最も顕著なものとして指摘できるのが、「個人化」・「私事化」である。しかし、ではそれによって個人主義、自立主義が確立したかといえそうではない。かつてと同じ大衆主義、大衆迎合主義が依然として残り、宣伝や流行に乗りやすい集団志向は変わっていない。高度経済成長によってもたらされた新しい生活様式は生活用品や生産用具が機械や電気によって変えられただけで、人々の思考方法や意思決定の方法までは変えていないことを意味している。つまり、高度経済成長はエネルギー革命や技術革新などによる生活の大変化をもたらしたが、それは基本的に政治と経済、政策と資本がリードした生活変化であり、村や町の生活現場からの内発的な動機や要求によって起こった変化ではなかったのである。つまり、高度経済成長期の生活変化は、外的な影響による形式変化が中心であって、内発的な能動的なものではなかったというこの点は重要である。つまり、「生活変化」と呼ぶべきレベルにとどまっているのであり、「生活革命」と呼ぶべきではないと考える。

【キーワード】 団地、ダム、家の自殺・他殺、生活革命、個人化・私事化